

[8]えびの市小学校体育連盟

(学校数 5校 児童数 859人)

I 年間事業

期 日	曜	内 容	会 場
5月 6日	木	・役員選出 ・水泳記録会について ・研究計画	岡元小学校
7月 9日	金	・水泳記録会について ・研究推進	岡元小学校
10月26日	火	・陸上記録会について ・研究推進	岡元小学校
2月下旬		・年間活動のまとめ ・次年度の方向性について	岡元小学校

II 事業部のあゆみ

1 水泳大会

- (1) 大会名 令和3年度えびの市小学校水泳大会（記録会）
- (2) 実施期間 令和3年7月
- (3) 会場 えびの市内各小学校プール
- (4) 出場者 えびの市内小学校（5校） 5・6年生選抜選手
- (5) 実施種目 ※すべての種目「飛び込みなし」

	5年生競技	6年生競技
	種 目	種 目
男子	25m自由形	25・50m自由形
	25m平泳ぎ	25・50m平泳ぎ
女子	5年女子25m自由形	25・50m自由形
	25m平泳ぎ	25・50m平泳ぎ
リレー	学級対抗100mリレー	6年男子100mリレー
		6年女子100mリレー

- (6) 競技方法
 - ・ 各学校で水泳記録会を行い、記録を持ち寄り集計する。
 - ・ 出場する種目は1人1種目とする。ただし小規模校に関しては1人2種目まで出場できる。
 - ・ 5年学級対抗リレーについては各学級男子2名、女子2名出場を原則とする。
 - ・ 6年リレーについては、小規模校に限り、異学年男女混合でも可とする。ただし、男子チーム扱いとする。
 - ・ その他細部についてはえびの市小学校体育連盟による競技規則を適用する。
- (7) 日程

各学校で記録会を設定し実施する。
- (8) 表彰

各個人種目、リレー種目3位まで入賞とする。
- (9) 反省
 - 感染症予防の観点から、今年度は各学校での記録会となった。大会は行われなかったが、全児童の記録をとることで、目標をもって練習に取り組むことができた。
 - 昨年度の反省を生かし、泳法違反者等について全体での共通理解を行ったうえで、各校で実施できた。また、来年度も感染症予防の観点から本年度と同様に記録会になる可能性もあるので、来年度に向けての課題や共通事項等を確認する必要がある。

2 陸上大会

- (1) 大会名 令和3年度えびの市小学校陸上大会（記録会）

- (2) 実施期間 令和3年10月
- (3) 会場 えびの市内各小学校運動場
- (4) 出場者 えびの市内小学校（5校） 5・6年生
- (5) 実施種目 50mハードル走。他の競技については、各学校の判断で実施する。
- (6) 競技方法
 - ・ 各学校で記録会を行い、記録を持ち寄り集計する。
 - ・ その他細部についてはえびの市小学校体育連盟による競技規則を適用する。
- (7) 日程

各学校で、ハードル走のみ記録会を設定し実施する。
- (8) 表彰

50mハードルのみ、各学年3位まで入賞とする。
- (9) 反省
 - 感染症予防の観点から、今年度は各学校での記録会となった。大会は行われなかったが、全児童の記録をとることで、目標をもって練習に取り組むことができた。
 - 大会がなかったこともあり、記録に学校差が見られた。各学校での指導の工夫改善が今後の課題である。

Ⅲ 研究部のあゆみ

1 研究主題

「わかる・できる・かかわる授業の創造と展開」

～児童が主体的にかかわるための指導方法の工夫を通して～

2 研究目標

- 児童が仲間や学習に主体的にかかわり、運動の楽しさや喜びを味わうことの出来る体育科学習の指導方法を追求する。

3 研究仮説

- 体育の授業において、一人一台のタブレット端末を主とした ICT の積極的な活用及び学習環境の工夫を行えば、児童が仲間や学習に主体的にかかわり、運動の技能を高め、楽しさや喜びを味わうことができるであろう。

4 研究計画

年度	H29年度	H30年度	R1年度	R2年度	R3年度
研究内容	○ 器械運動領域における教師及び児童へのアンケート調査	○ アンケート結果をもとに、授業づくりのための実践及び検証	○ 指導法の周知及び幅広い実践	○ 指導方法の実践（陸上運動・器械運動）	○ 個人用タブレット端末の活用

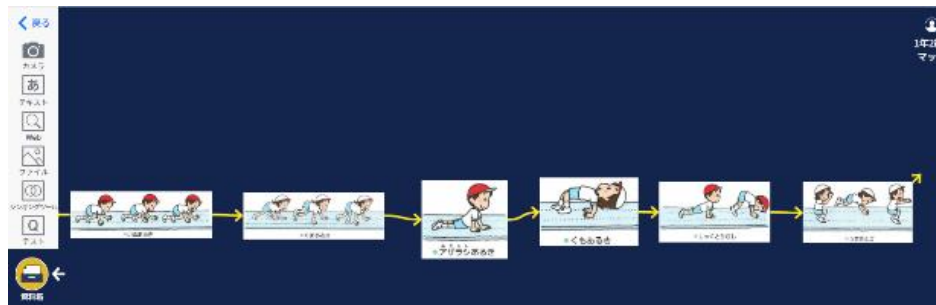
5 研究の実際

えびの市内では、本年度4月より全校児童が一人一台のタブレット端末を活用できる環境が整った。昨年度までの ICT 機器の活用とは異なる特性をとらえ、より効果的な活用の在り方を実践的に研究することとした。

(1) 参考資料提示のツールとしてのタブレット端末の活用

体育の学習では、児童が取り組む技についてイメージを持つことは重要である。そこで、参考資料提示のツールとしてタブレット端末を活用することとした。

発達段階の特性から、提示方法を工夫した。低学年では全員が同じ技をする機会が多い。そこで、児童の端末に本時取り組む技を提示、全員にイメージを持たせたのちに学習を進めた。



本時取り組む技を提示したもの

高学年では取り組む技が個人によって異なる場合が多い。それはつまり、児童が参考にしたい動画も異なることでもある。そこで、児童が自分の取り組む技に応じた動画を参照できるように、参考となる様々な動画ファイルを児童の共有フォルダに準備した。児童は、学習までに動画を選択して見たり、学習中に自分の動きと比較したりしながら学習を進めた。



共有フォルダに保存された様々な参考動画

(2) 技能の変容の自覚を図るためのタブレット端末の活用

タブレット端末が個人の学習ツールとして利用できるようになったことで、個人の学習結果の蓄積ができるようになった。体育学習においても単元を通して活用することができ、毎時間の学習の様子を映像データとして個人のタブレット端末に保存することとした。こうしたことで、毎時間の変化を比較することができ、自己の技能の高まりを自覚できるようになった。また、そうした自己の変容を視覚的に理解することができたことで、学習に対する意欲が高まり、さらなる技能の向上を目指して取り組む姿が見られるようになった。

下の児童は、自分のこれまでの動画データ（資料では写真データ）を比較したことで、抜き足を上手に開くことができるようになったことや、腕を使ってバランスを取ったことでタイムの短縮につながったことに気付くことができた。



(3) タブレット端末活用の日常化

児童は、学校内において個人のタブレット端末を常時持つことができる。つまり、いつでも利用できる状態である。体育学習に関心の高い児童の中には、休み時間や放課後に、これまで記録した自己の学習の様子や、友達の様子、教師側が提示した様々な動画を見る様子が見られるよう

になった。



自分の動画を視聴する児童



友だちと参考動画を視聴する児童

(4) 学習の効率化を図るためのタブレット端末の活用

これまでタブレット端末を利用した体育学習の課題として挙げられたものに、「撮影に時間を要する」というものがあった。それは、撮影のたびに被写体となる児童のタブレット端末に交換して撮影しなければならないからであった。しかし、現在の児童の持つタブレット端末は、通信機能を利用し、一台の端末で撮影したデータをグループ全員に送信することができるため、撮影する端末をその都度取り換える必要がない。さらに、データを共有することで、グループ内の児童全員の動画をそれぞれの端末で見られることもできるようになった。一台の端末の映像をグループで集まって見なければならなかったこれまでと比べ、自分の端末で友達の映像も見ることができ、自分の必要性に応じて拡大したり、スローモーションで見たりすることができる。さらに、児童が狭い空間に集まる必要もないままに、グループ学習による効果を発揮することができる。新型コロナウイルスの影響がある現在、その安全対策の面からも効果的であった。



距離感を保つてのグループ学習

6 成果と課題

① 成果

- 児童一人一人のタブレット端末に参考資料や動画を送信しておくことで、児童の学習進度や取り組む技能に応じて、児童が資料を選択することができた。また、学習時間以外でも資料や動画を見ることができることで、時間の制約を受けずに何度でも視聴することができた。
- 単元を通してタブレット端末を利用したことで、児童自身が自己の変容を把握できるようになり、技能獲得に意欲的になった。また、そうしたデータの蓄積は、教師側の児童評価にも活用できた。
- 各自のタブレット端末をもとに意見の交流を行えたことで、コロナ禍においても効果的なグループ学習を展開することができた。

② 課題

- コロナ禍のため、研究授業などが実施できず、体育科におけるタブレット端末の活用の有効性を他の先生方と共有することが難しい。
- 体育の時間にタブレット端末を利用しようとする、Wi-Fiの接続可能範囲の中での活動となるため、活動場所が制限される。